



茅 五百五十九号

全



佐々木氏
文庫
用



月日ハ百代の色空くうてり
ふんも又猿人也毎のどよせ涯
とうくこの口とて老とむ
うくおハ口とて猿と撫とむ
古人も多く猿と死なるといふ
るもいづれの手より片とて風の
はくつれて標作のさみやうす
海濱くともくもまの状にとの

壹

破屋より露の古葉をささげて
やまもそらもまはるゝのささげ
白川の淵をささげてささげの神の御
はなしてささげささげの御
ささげささげささげささげ
引の破屋よりささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御

別荘より露の古葉をささげて

ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御
ささげささげささげの御

まゝて送らぬとてあつて旅
とけねくお途なふりそのよし
物よふさうりて幻のちまうこり
旅先の洞をこく

け春物も晴美の洞
もよまうきのゆく一行道まを
アさうり人こいのま中しめまを
とほけのまゆまをこくまを

ことし元禄ニさせし物奥羽も余
のり締りうめしおひまを
呉こしお髪の旅をまを
年し物もいおこめまを
あせしてゆくと定ふまを
まのけ其日御早加まを
まをまをまを
まをまをまを

うと出づる侍をひきつゝるハ世の
流きゆく雨具を筆の筆を
あつらひて侍とてさるハ
さうしふ侍をさうして流の流
あつらひて侍とてさるハ

家のハ流より侍より同行雲を白世
神ハ末のをむけや世の神とて
富と一姓也無戸室より入て流のよ

ちういのみ中より火と出見のみと
せむらひより家のハ流より人
物を流むる一侍もこの流也將
このと流よりよとて流より流記
の昔世より侍より侍

世日光山の流より流らるるの
云々から流より流より侍より侍
流より流より侍より侍

戸付中一社のそのの権もあねて
体もつとまといふら仏の満世を望ま
示現してうら業門の乞食順礼
くまきの人をききすけりやと
けりてのますもりよ心とてめて
みるく唯せ智すくあてて心
出偏固の者也剛毅末訥の仁
をこそくらひと氣楽の法信をむ

きりぬ

卯月朔日御ふく指ねすは昔
此山を二荒山と書しとて海
大師開基の時りえんといふよ
歳末来をもけりやとやと此
清光一夫くくやとて恩沢荒
しあわれに民末坊の極福ちち
ねほ多くし、善とけりよ

何れもきつとてはる毎朝のなみのりかえ
王賢とハハ流うふりてきつハハ
白

利捨て王賢とらう一を文
雪良ハハ合式とてあつと
芭蕉の下等しく形をとらうとて
薪氷装と方とをよくこの
ね一よ象浮の眺共とてきつを

收し且ハ羈旅の難をりて
旅之曉物と利てきつと
まうと無五を改て宗悟と
仍てきつとらめ白とてなまのこ
宗カ何りてきつと
其餘下らとをせりて流とて
頂より花流して百と人との
流とて流とら石崖とて

ひろめ入て滝の裏よりこれハ
らみの籠とト付く付ら也

将時ハ遊く物や夏の終
那頃のころこれと云ふ人おた
きより物と知くしめておんを
ゆえとすふくく一村をんりて
りよ雨降日さるれ農夫の家
よ一巻をりて明れハ又路中

きりくくし路附のころあり
美刈まのこよふけいよれハ路ま
といこもさすくはくぬまに
いこまじやれもハ路ハ横
よわれくくあま務人のん
ふこまじくあやハ路ハ
のこまじ所ハ路ハ
くハ路ハ路ハ路ハ路ハ路ハ

伝をさしつてさしつら行ハ小娘とて
名をとがせぬとてさしつられぬ名への
やさしうらたれん

うほねとハ八き様子の名をさしつ

好て人里よむれハあさむとを
つりよおをさしつらとさしつら

黒羽の館代浄坊ちけうのさし
まはれとさしつらぬあさむの伝ひ

同和流つらつて共才相あさむと

さう朝々ノ勢とさしつら自のあさむ

とけいして歌原のさしつらね

うしとをあさむとさしつらね

よ遠達して大退おの伝とさしつ

形原の陰原をあらさしつらあさむ

古墳をさしつられよの八幡宮と信

と市麻の的を射つらあさむと

ふふ氏神正八丈とららり
此神社も竹とてつたて敷き
こころのまことみゆるまらぬ
心りーゆり

後驗光明まこと者うこくまね
見こり者堂とゆり

夜とよ足跡をたむ首途か
高ふ雲の序さのわくと佛頂和る

ふん法わりの

似立横の五尺よ辛くぬまの
むすよくちー雨よーいさハ

と松のふたーく定くさ付竹の
いつろやまきしりよ共たんと雲層
さよ松と雲ハ人ててんて共
いさよいさよ人サあくはのり
赤さいさくみりーす彼ねとる

とハおくあるく〜さ〜よ〜て〜入〜ん
あ〜よ〜ね〜校〜き〜く〜塔〜と〜〜の〜し〜所
月のも今ね〜き〜〜十〜系〜よ〜〜ふ
橋を〜わ〜ら〜り〜し〜と〜門〜よ〜入
さ〜て〜あ〜だ〜い〜つ〜の〜ち〜と〜や〜ほ〜の
ふ〜よ〜う〜ら〜の〜ち〜れ〜ハ〜石〜上〜の〜小〜巻〜石
塵〜よ〜じ〜す〜ん〜け〜ら〜め〜禪〜師〜の〜花〜園
は〜實〜は〜所〜の〜石〜室〜と〜み〜〜し〜

木啄も〜だ〜い〜や〜う〜く〜な〜ま〜ま〜
と〜ち〜は〜つ〜め〜ら〜と〜ね〜く〜お〜け〜し〜
そ〜ら〜り〜教〜生〜石〜より〜教〜休〜し〜ら〜と
ら〜よ〜し〜送〜〜ら〜せ〜ら〜行〜の〜み〜め〜と〜経〜冊
ら〜せ〜ら〜と〜ん〜や〜し〜〜し〜〜と
ら〜せ〜ら〜と〜の〜〜と

阿字を讀く〜と〜ま〜ま〜し〜
教け〜え〜ん〜ハ〜過〜る〜水〜の〜あ〜ら〜ら〜信〜は〜の

石の毒をよむこころひんす輝
蝶のまじりたる秋のこのこころを
うさぎのりかきくみほるるの
柳ハ世に片の里とありて田の畔
し物と此石の郡守戸部某の
此柳女とて年をとれくよめし
けりしあふといづくのまじりやと
しをいふ山柳のうけりしと
まじりぢりれ

田一柳極しまきる柳うれ
心許るる日うさぎのりかきく
の園よりりて枯心をとりぬいと
都へと使ふももみし中もも
此園とて園の一うさぎ風操の人
心をこむ秋風を身とせし
おなをを侍りしきき祭の精

何れ也邦の系のよか、こゝの
不の喧嘩もして言ふとてゐる
はるすら古人冠をよ— 衣襟と
あ—とと後浦の筆も—と
あわ—と

邦の系をかほ—と開の喧嘩も
とく—と熱いさ—とけくさ
川を流るたりと津根もく古

よ名城相馬三春の庄常陸は
力あをさうひてふつ—とけけ
ま不をりよ今ハ—と書て物
新つ—とす川の澤—と等衆
とふあをさうひて—とあ
先右行の圓い—とつ
同長途のく—とみま心つ
風景—と流るる—と懐也—と

断てくくくくくくくくくくくくくくくく

風後のおやおくの田植く

そとくくくくくくくくくくくくくくくく

銀きりごとくくくくくくくくくくく

此方の傍くくくくくくくくくくくく

ときめくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

あつくくくくくくくくくくく

栗をいぬくくくくくくくくくくく

西方はくくくくくくくくくくく

のくくくくくくくくくくくく

のくくくく

世の人乃んけくくくく

等窟くくくくくくく

の宿を維きてあくくくく

色くくくくくくく

もやくくくくくく

ふうつとほまうと人々もあはれ
きしと人々もあはれをみる人々
きいふつとくともあはれをみる人々
ふのつとくともあはれをみる人々
きいふつとくともあはれをみる人々
きいふつとくともあはれをみる人々
きいふつとくともあはれをみる人々
きいふつとくともあはれをみる人々

あり里の童子のあはれをみる人々
昔の世のよき人々をみる人々
あはれをみる人々
あはれをみる人々
あはれをみる人々
あはれをみる人々
あはれをみる人々
あはれをみる人々

早蕨のつとくともあはれをみる人々
月の光のつとくともあはれをみる人々

とありし由り佐藤左司う回れん
たのし係一とす身一なる飯塚の里
跡跡とみえりらくくりよぬら
しうらわらるるも若月、田舎也林
よ大手のたると人のあぬゆよす
て間をさる一みこりうのちま
づ家の名碑をみせし中も二人の
家よとらる一せんも也ぬられと

うららきくくんの世も入るお
らと波をぬらる海の石碑
とまきこきよあつちり入て茶
をんハハまよ義経の太刀を
らいなるとしりし什おとす

爰も太刀も五月よ、
其の故

五月朔日のう也もお飯塚よとよ
と温泉われん湯よ入て客をう

おのふとせしむる 迷をまてあや
ういふ負をきし 灯ももろくれはあふ
この火いけくこ 麻布とよきん
針すくあふ入て 雷鳴雨さきあふ
降りておのふよ どりもわか 雲散り
こころおききて 眠りあふあはく
おのりて 借入身よるん 経あふ
まじもやしく つかんこころい

おのふの余は つかしよるん
業おの経よ 出らんこころい
まじもやしく つかん 痛えあふ
ととと 薙旅邊止の 行脚捨身
無常の 觀念道路よ ときん 乞天
の余るのこころい 柳よりあふ
路縦横より 踏く 仔細の火本
戸をこころい 籠摺 白石の 柳より

是迄の邦へ入まはる中おまの
の塚ハいつのちかきと人ま
こまありあそむるこゆるらほ
の里とこのこまゆきとまの程神
の結くことのは今よりありといふ
此の五月よりいふま
あつれはるるよまらるる船なり
まらるるまらるるまらるるまらるる

のちよおまこり

是迄ハいつの日のあかり

志流よらるる

武隈のちよまらるるまらるる
根ハ土除りニまらるるわねて
のまらるるまらるるまらるる
は降らるるまらるるまらるる
下あり人まらるるまらるる

の橋杭よきしれきるるのりうし何
きはしやねハヤノミ等しういん
海くわ付くあらハ体あらしハ橋
継きとせし水き穿し今将子巖
のさしつとせのちいしめしめし
松のくしししししししし

武隈の松女を争とさし橋と譽
しつししの橋ふかさししはわハ

橋より松ハとよきと二月越

名尻川を渡して仙臺より入あやあ
物く口や流石をとりめしてはふら
遊るるす宮より畫工かた使つとよあ
河や砂心あら若とけりて知る人
しるてふこの有るはきまはうりしぬ
名とせらと考ふはれんくして
一日案内す宮城跡の共狀是なり

あはして秋のうらささむやうき
玉田よと帰つて一園ハらとむ
あはれ也日暮しわぬねの枝より
入てい家を本の下とむさうさうも
うく家ゆけさハふとさうさ
とさうさハさみされ業師業を天神
の赤強ととおくさるハとねぬれ
ね修治うさのあき畫うささうさ

思得のほねつけとら草鞋豆
あはれさハふ風流のささの
うさうさうさ其美をささう

あやかしさうさあはれ業師の秋
ふの畫圖うさうささうさうさ
あはれのあはれさうさ十首の
あはれ今もさうさ十首のあはれ
を洞て國さうさうさ

臺碑 市川村多賀城下有

つゝの石少くハ高サ六尺餘横之丈計
此石を嘗てノ、又字也四維國
界之故重と云々此城神龜元
年按察使鎮守將軍大野朝臣
東人之所里也天平宝字六年參
議東海東山節度使同將軍
惠養朝臣猶修造而十二月朔日

一本曰 不理也
他本曰 何里也

一本曰 善美朝臣
朝猶修
造也

と有聖武皇帝の時之出あり
むしハりト多々を枕中
流傳ハトハトト山明川落て
何々石ハおて去々
本ハ古クククククククク
代々々々々々々々々々々々
の々々々々々々々々々々々々
歳の記念今觀ふ古人の心

を聞たりし所の一徳ある余の
歎し蕪旅の方とあはれこ
同し落らるる也

これより野田の志川伴の石を
末乃松といふと道へ末松といふ
松のあひく皆葉はくくして
うりー枝をつらわらぬの末に
ハくこのこととせしむる

壇うさの海よ入おのいねをさへ
五のそと御をれて夕月あ
舞うるもさうさうさうの
きつてきつてさうさうさう
てさうさうさうさうさう
いさよ也其の目音は御一乃
隈毛さうさうさうさうさう
のさうさうさうさうさう

くもあしひなひきくら細きうち
とく桂らううううううううとと
うううううの遺風とれうううの
うううううううううううう
のう神う信國守再興とれ
うううううううううううう
うう石の階う候うきり祝日あ
うの玉ううううううううの

果蓋土の坊ううう神靈あうう
うううううううううううう
うう貴うれ神あううううう
ううのうううの向ううううう
ううう奇進とるう五うううう
今日の前うううううううう
うう渠ハ勇義忠孝の士也佳令
今ううのうううううううう

磯人の道と勢をよみて
名もなきもよきとあり
午よらう一船をりて
其間二里餘碓氷の
柿の木の枝葉
一の好風をく
東南より海を
湘江の湖をきよみ

あつて歌の天を
まはるふれ
三重よき
ありあり
うき
波風
を
とく
美人の顔を

神のむらゝ大とすまのまゝなるかき
よや造化の天にいつきの人の筆
をふらひし詞をよみさせ

雄流の破れ地つゝとて海を渡る
流也(すま)の御師のふ室のた
り経石をよめる将ねのよけり
世といふ人し務くくはるはる
流終ねるよみしあつちのまゝ

菴岡の傍るゝいゝのらん
ミラ ぞいすまのせんまつゝくまの
かゝる月海くうつかりて登るま
又あゝきじ江上よゆりては
物れハ宗をひくゝ二階を修て
風雲の中へ流る存くし
あやゝまゝしてあゝるはにせ
ね時や流るるは
三田 かくいふ

平ハヨシトシテ 願んとして
らむとて 四ノ房をとりて 時を
松ノ木の 竹ありて 京安通 松う
とよの 心すを 結ん 竹風 濁り
ありあり

十一日 瑞岩 ちよ 指 中 ちよ 二十
世の 昔 ちよ 竹 中 ちよ 中 ちよ

八ノ 竹 中 ちよ 竹 中 ちよ 竹 中 ちよ
雲 ちよ 竹 中 ちよ 竹 中 ちよ 竹 中 ちよ
夢 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
仁 土 成就 の大 伽 監 と ちよ ちよ ちよ
彼 見 仁 聖 の ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
十一日 平 和 泉 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
一 難 鬼 葛 菟 の 竹 ちよ ちよ ちよ

とてわたり終る路少きまゝして
石の巻といふ漆よおくりぬる
とらみてやまの金花と海と
見わたり數百の廻入にまつと
ひ人及地をいづるひして電の
煙をうつまゝにわらひてやまの
下よもまゐるやとちとすれ
とらふとちとす人といふ
小家よりおをらひてつる
みまゝのたまたまひり神のち
尾ゆらの牧場の草のうら
めりてあそびのたまりぬ
まきもほよろつて戸伊六も
一室して平泉とちと其間北
余里とちと

三代の業耀一膳の中

大門の北ハ一里ニありて有る者衡
より北ハ田原ノ處ニ金鷲山あり
形をみたり先言籠ノあり其
北上川南部より流る大川也
衣川ハ和泉ノ城をめぐりて其
の下として大川ニ流入康衡ホ
河沿ハ衣ノ岡を隔て南部口
を以て學女夷をめぐりてみたり

備前義臣 行て此城より

こり功名一時の最とるる国政
まて山河あり城春よりて草
まみありと笠井ありて町の
ついで岡とまて一はのめ

夜屋や兵とて夢人の足

卯のふと魚房みなり 白毛

高して再ありて雲山開張

す徑堂ハ三將の像とのく
光堂ハ之代の棺を納りとのく
佛と安置す七宝をめぐりて
殊の扉風やまき金の櫃 茶
雪よけて既頽廢之虚カ最
とぬくことを四面新し圍て藍
を雲霞？風分と後物付千歳
の記念といはるなり

五月旬の修のくすや光堂
南ア道きくくくやりてくくく
里く依るふく修と竹のく修を
とてくくくくの修あり尿前の開
くくくく出羽のくくくく
此路修人修くくくくく
開くくくくくくくくくく
開くくくくくくくくくく

日統言々此の封人の家々を
うけし念々此の心むらゝ風ぬれ
しうらゝあゝと中々

蚤虱の尿すまじ

何れのことより此の
大らとほめてゐる
れはるる人の人を
さうし

雅なれは宛竟の
をよこし
先づい
うらゝあゝと中々
事なき
り
森と
下園

雪の如くつらぬく心也
雪の中踏ふく氷をわたり
よ藤し肌よつらぬく汗を流
しと家上の庄くおれよの
葉内とくぬのよやうせむら
か不用のよき思ふるを
まらうやうは念をさうらむ
まらぬぬよきてく物とく

乃也

尾不深しとく清風とく者を
ぬきハハるるぬきと志い
くく都しぬきとく
すくよ旗の情をぬきハハ
ぬきとく途のらうらぬき
ぬきとく

ぬきとく我をぬきとく

遠出よふわつ下のひまのあ
まのこゝを待たしむる影のふ

稽古する人ハ古代のすゝめ

山形頗くくま石もくまらまより

意覺大師の同墓くくく

閑の地也一見すくくく

のまもくくくくく

くくくくくくく

日くくくくく

まくくくくく

巖と重てくくく

土石たてき備くく

扉を閉ておのくく

くくくくくく

往京の寂冥くく

閑くくくくく

家上川のひとと大石田とて
日影を待たまふとちと諧の程
くちれてとれぬまのむしとさ
しき角つあうのつとやうもや
はなよとらあしして新ちや
ほくしあみまうよとてもみら
まへへとら人しとけれとつり
まへとまあしぬこのまか風流
まへとまあしぬ

家上川ハみらの一とらとて山
を水ととすいこもあまてうも
あうろしと難ふと枝敷とあか
と流て果ハ酒田の海へ入た右
雲ひあその中と船を下すも
よ指つていふとやいなふといふ
白糸の流ハ青葉の流くはな

仙人を岸より修てさるる
さつてふあや

五月廿をいつて早一と云上川
六月之日羽黒山より北に園司た吉
とと者をととて別の中代今とえは
園行より湯より南谷かふ後より
今一と憐戀の情こさやうと
あうとと

甲日幸坊をわし誂諧具り
有難や雪とくわす南谷
五日権現より當山岡能除
大師はいつまの代の人ととやを
ととて延喜式より羽別里山の神
社と有書寫黒の字と里山と
ふとととや羽別黒山と申
て羽黒ととととや出羽といふも

鳥の毛羽と此國の貢物と敵と
風土記より仔細なる月山湯殿
を合してこゝより當寺武江東
敵と屬して天台止觀の月明
くくく因に融通の法の灯をけ
るひて僧坊棟とくく終験
行法を勵し一頁の靈地の繪
如人貴旦より繁榮長くし

めくまぬ山と謂ひし
八月月山のりら木綿をあら
しりりり実家より路をくく強力
とりのくくくくくくくくくく
霧の中より氷雪を踏くのりら
市八里より日月行きの雲間
よ入るとややかれ鳥籠よりく
頂上より踏ぬく日没して月影を

毎と浦の條を枕とて臥て
心身を新り出でて心は清き心
返後くく

谷の待ふ銀流小座とらまき六本の
形は雲水と撰て空より潔く
くく銀を打終月山と銘を切
て世より貴きく彼龍泉よ剣
を評とくや干将莫邪のむと

とく一道のよ塩鉄の瓶あくくめ
くくそれきりきりく種くくかて
とくくやきめあくととんくくあ
梅のつらとまはひくくやうあうあ
秋雪のりくく清く春をこくめ
くくくくのみあひりくくくく美この
梅もくくくくくくくくくく
傍正のきくのみくくくくくく

たふらしてさくのめさるせら中の
滋あり者のはむくくして他言ら
中を移す仍しきりそそりれき
坊しゆれそつ園園の雲し依し
まふ順礼のむく経馬のす

清しやあのみ月の船さつと
雲の雲すまひあつし月のみ
後しきめはゆめくよめしむれき

ゆめしはあむむの月さつと
羽黒しきりて鶴の園の城下きり
氏重行とむ物のぬのさあむむく
られて誂信一さきあたる昔もさ
さりぬ川あしきりし流河の漆
しきりて園名を玉とむ鶴師の作
きりぬす

らぬしあ吹浦しきりてみみ

暑き日は海より雲上り
江上人陸の風光好むをありて
今象ほりて方丁と貴河内舟渡
より東北のまらとと砂礫を伴ひ
いこころをみりて其際十里目乾
やかきつらに波風と舟を吹上
雨朦朧とくしき海の山くくろ
雲中より莫化くくし雨りも奇せと

きは雨後の晴色みね無憂と雲
の管海く膝といましく舟の晴
を初も初天候霽く柳のそ
やうくさし出ら行く象ほりて
くく先能固山くく舟をよきて
らま燕ぬの江とくぬくしむあ
岸くく舟とありんく舟のそく
くまねく梅のたまた舟の所

の行人念ふのこころ江上よは陵
けり神切后宮の伴墓とて
を干満殊るといふよは幸
ありし中いふとてはさういふ
中よは昔のさふうにたして
をなすはては風来一服のす
をきし南とて海天をけし
其はさういふ江のあり西へはやく

の舟路をさういふの東へはを築て
舟田とてさういふ海北とて
さういふはさういふとけしと
と江の縦横一里さういふ舟
さういふと又異なりは後ハ
如く象深はさういふと
はさういふとみとて地勢
とさういふと

象深也而く我龜形すあふ
改神也形はさかぬし海原
みあれ

象深也料理行く人神象

象の象や戸移をまかしく又 淨
このふの商人世身

岩上と一雌鳩の象ありて

象の象ありてやみさこの象

酒田の象はりて重て北陸たの
重よらと遠くのありし物とて
やうありし加賀の府をくして百世里
とす嵐の園とてくちまこと海原
の地とまかりて改て象の
ふつゆりの園と到らせ九日
暑温のさう神とてあやう
あはれありて木をまかしく

子月也古日し夢の盡くハ
荒海や依後よまふ天の
今日ハ親しき子とて大なり
新しき一國一の羅石と
知つたれはれと捨引よき
存しよ一國一に面みさ
あまの女めあつこ人斗しき
手老しきみのこのあまも使て

お宿しきとよけハ親後のあ新
等と下ハ世女馬一伴珠かま
すくしは園とて女のこのあ
あすハ古つしきとてあ
とてあまのあまのあまのあ
のよすらけよ力をとあ
あまのこの世とあまのあ
あまのあまのあまのあ

うよこさあ〜とあまをこころしく
も痛入りてあ〜と捨てる〜とあ〜と
むら〜とくり集るとあ〜と捨てるの
うさあ〜とりええあ〜と〜と中〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ひは〜とん衣の上の〜と捨てる大慈の
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

九川をわたりて那古と云ふ川
出據の者には春のうらやま
和秋の香とありさよふ、と
人よふれとさよふり五里い
はひしとむあのから陰よあ
空のせいあさくさすくさ水えき
の一夜の者くさりのあるさ
くさくとけれとくしの園に入

こせの香や

入者ともあは

ちのあふらりら谷をこして
今頃ハ七月中の五カし
大坂よりよ高人伊慶と云者
ささ水うばかるとさ
二笑と云ふのはなす
ふのくさくせよ知人
よささのかさ母と云り

某

其兄とてを侍す

塚も物け家法あつた所風

あつたつたつたつたつたつた

秋涼も毎よむけや瓜茄子

途中吟

何ごと目ハ難句もあつたの風

あつたつたつたつたつた

とらふまゝわ小石吹たつた

字力

此亦太田の神一社一情まあつた

甲冑の切ありはさるは氏より

属と一町義朝とよりあつた

とわくうし平士ののりあつた

目庇より吹あつたつたつた

つよのりりの金をちのめ龍に

うめ形あつたつたつたつた

木曾義仲あつたつたつた

よこめしんけりー極元の地を
う供やーヤー花よのあこあ
縁紀ろーみこり

むんちる甲のら乃をりくす
ふ中の温泉水よりりりる白根
う嶽はりーみるーくーあひむ
先のら修し観音堂ありふ
ふのはきをこすこ下の唯れ

さるさとこめいてはふ大無大徳
の像と安曇りーめいて那谷
と名舟のよとや那智谷組の
ふ字をあらうり行ーとてあ
石とさくー古松極まーく
草とあまの小出まやりのよ
まらりーみぬの土成し
石ふ乃石よりりー秋の風

下
源泉の流す其功有明り也

と

山中や菊ハききしぬはらの白

つとくは物ハ久年と物と

いよてゆ童しくしつ又誹諧を

好え流の貞室より穿の心

さきよまりしは風雅と守

めしれは流るゆへ貞徳の心

とみりてせよさうら功名

はせ一村判付の料を流す

と今又むしは流とハらりぬ

曾良ハ腹と物て伊勢の

国も流るとおらぬありあね

先きてしりし

いりてきりれ休とそ好の系

とちりてありりありし

寺

おりのこころは復鬼のちか
雪よささるかこころもみ

今日よのちすけはえんきあり

大聖おの城ふ全昌寺とらふ

さうりさるも初加賀の地こ

言ふもふの言はるるもはく

淡宵秋風ややこころ

とおよ一巻の扇ふらこころ

昔も秋風をとやまして風響あり

外へ明りのつらやこころ清徑

あうすむかこころ鐘振鳴りて

食堂より入るよハ知ふの国

了こころの平一うこころきりり

下るこころもこころ信りし紙硯と

こころ階のこころもこころとよみ

おそんこころ中の柳こころあふ

土庭掃てあそやちこゝあ御
よりいへぬさき一してさき鞋み
うしや於在知ふか法を法
の入江をみし持りく海
辺のねをくらみ

あそりやれしけりそとこるじ
川をきれしむのねあり

此一首くし物系あそり

一辨をわりのハを男の物と
まきくくし

丸団天龍寺の者老ちき団
しりきくちらぬ又金沢のあお
とりあのうわあよんまわし
しちきくくしきんあそあそ
風系色こくしんしんし
おそいあそれるからねこるよ

つゆ今統あしとみかて

おかきへ解引はく余成成

五十了らうよ入て永平とを乳

す道之程師の忠孝和邦様

ふ里を遊てうらうら信り

池をわくくわの貴さく久

ちとる也

福井ハ二里けあかえうへ 版

きしりてきくくきくく水の

路くくくくく等載くく

ちき隠士をくくくくく

けくくくくくくくくく

十とくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

ちちれといきくくくく

うくくくくくくくくく

引ぬてあやしのあまゝくまは
 命らふのこころをくし終らば
 ありよとらちをいふくまは
 けうくしをいふとけをいふ
 ときらぬあまのあつらひ
 ちからよとらちのあまのあま
 はあまのこころをいふくま
 あまのこころをいふくま
 うれあまのあまのあま
 むしあまのあまのあま
 けいけいけいけいけいけい
 えのあまのあまのあま
 名月につまのあまのあま
 きりよとらちをいふくま
 ねみきりよとらちをいふくま
 おとくれよとらちをいふくま

うく水て比那々々々々々々々
あまむつの橋とわさつてあは
の蓋ハ水々々々々々々々々々
の甲ととととととととととと
強ハく極々極々々々々々々々
くあ厚とととととととととと
あれ一々々の津々々々々々々々
りくむ々の夜月ぬぬぬぬぬ

あまのあさくくくくくくく
とらつそ 越洛の多むれ切長
の信信々々々々々々々々々々
く帰すあ〜れ〜り〜いの切神
くくああ々々々々 仲哀 天皇の御
廟也 社頭神々々々々々松の本
の同く月へのりの入き〜々々々
の向み霜とま〜々々々々々々々

往昔おりの二世の上人大邪
教起のりなりてさうし
を刈土石をさうし泥滓と
うはくそて糸信はまのれ
るし古例今よさうし神前
うさ砂をさうしひかえれと
おりの砂おとすゆくと亭に
めくろく

月信一遊りのめくろく
すまの亭さのめくろく
雨降

名月おの国日おとく
十六の亭をさうし泥滓の
小貝ひらりと種の漬
まてし海占七里あり天屋守
とそめの破籠おのり

やうきとてちかき方僕あはし
あしふりあきて上風の
さしつらぬほろわの
あらしのにおあはれ
さほふさありのさあは茶を飲
酒とあはれあはれ夕あれの
ひさしつらぬほろわの
あしふりあきて上風の

浪のうわあ見しす
其日のうわあ見しす
あしふりあきて上風の
あしふりあきて上風の
あしふりあきて上風の
あしふりあきて上風の
あしふりあきて上風の
あしふりあきて上風の
あしふりあきて上風の
あしふりあきて上風の

し如行々家々入集るる本
川子荆口父不其外さ
き人々日之想とよしくて候
せぬのありあつて且
悦ひ思ひさうな旅のおと
とくさうなやうさうな月
六りよめれく伊勢の辻宮
おとくさうなあまのつと

吟の

ゆきみ

わたりり

此一書ハ芭蕉翁奥羽乃紀行所
素竜ノ筆也書ハ縦五寸五歩横字
七歩紙ノ重ハ十二首尾ハ白紙ニ加
外ハ素紙ノ故ニ珍畧紙成紙ノ表
紙紫乃糸赤紫ハ金ノ表補ラシム
る白地ニテくノヤウナルと自筆ノ書
テ滿身ノ孫不遷化ノ後門ハ去来
行ノ事ト又書蹟ノ書ハハ書蹟ノ行

今昔集の由以心々揺るがしと歎き也
と云ふ事此書に冬多しと相違し

佐久間氏
文庫必用



神國控

